



©Yuki Asada

## 地元女性のアイデアでフェルトの小物がヒット商品に！

ナイロビ近郊のマトマイニ・チルドレンズ・ホームの一角にあるマトマイニ工房。女性たちがゾウやキリンなど動物型のスポンジにチクチク針を刺している。反対の手には色とりどりのフェルトが見る見るうちに、かわいらしいぬいぐるみが出来上がっていく。

一方、工房の外では、別の女性たちが手のひらをクルクルさせている。「フェルト玉よ」。そう言うのはにかむ彼女たちに、NGOセーブ・ザ・チルドレン・センター（SCC）代表の菊本照子さんが優しいまなざしを向ける。「やっとヒット商品が生まれたんです」。

もともとスラムの子どもたちの教育支援からスタートしたSCC。その後1987年に孤児院を設立、100人以上が巣立

っていった。「でも、ずっと支援を続けられるわけではない。地域で子どもたちを守り育てる力をつけなければ」。そんな思いで22年間、シングルマザーや貧困女性の収入向上を目指し、モノづくりに挑戦してきた※。

最初は失敗の連続だったが、彼女たちのアイデアも織り交ぜながら“細く長く”続けてきた結果、カラフルなフェルトのキリンが誕生した。「こんな奇抜な色、売れるはずがない」という菊本さんの思いはうれしい方向に裏切られた。彼女たちの自由な発想が、スタディーアールで孤児院を訪ねる若い日本人女性の心を次々に射止めたのだ。今では、フェルト玉のネックレスや携帯ストラップとともに、注文が相次ぐ。

原料はケニア山のふもとに生息する羊の毛。自然にやさしい草木染めにもチャレンジしている女性たち。いずれ売れ上げで孤児院の生計が立てられたら。菊本さんの夢は広がるばかりだ。

※2001～06年はJICAと連携して、4つのスラムで住民の生活向上を支援。



キリン型のスポンジに色のフェルトで模様を入れていく

★フェルトの小物（ぬいぐるみ、ネックレス、携帯ストラップ）を各1人にプレゼント。詳細は38ページへ→

